

Mauritius Wilde,
Das neue Bild vom Gottesbild.
Bild und Theologie bei Meister Eckhart,
Universitätsverlag Freiburg/Schweiz, 2000, 384S.

松 田 美 佳

最近のエックハルト研究の一つの重要な動向として、ディートリッヒ・フォン・フライベルクの哲学からエックハルトを理解しようとする視点がある。モイズィツシュは、エックハルトについての教授資格論文¹⁾で、ディートリッヒからエックハルトへの影響関係を、能動知性論、本質的原因論、アナログア論、超越論、像論などさまざまな理論に関して指摘している。これらのさまざまな点のうち「像論 *Imagolehre*, *Bildlehre*」における影響関係は、その後もフラッシュ²⁾によって、さらにまたシュトアレーゼ³⁾によって改めて論じられている。このような研究動向を引き継ぎつつ、エックハルトの像論の体系的解明を試みたのが、本評が取り上げるヴィルデの博士論文である。

ヴィルデの研究書の主要な功績としては、以下の三つの点を挙げたい。第一に、像論によって、エックハルトのさまざまな教説の分析を試みる点である。第二に、像論によって、エックハルトの文体の解明をも試みた点である。第三に、ディートリッヒからの影響関係を確認するだけでなく、トマスとの比較も行っている点である。この三つの点について以下に述べたい。

第一に、ヴィルデは、エックハルトの用いる鏡像の比喩の分析から出発して、エックハルトのテキストから像論を再構成し、その像論に基づいて、神と人間との一、神と神性の区別、三位一体論、キリスト論、魂の内なる非被造的なもの、創造論、アナログア論などエックハルトのさまざまな教説について分析を行っている。ヴィルデの

分析は、過去の研究が指摘してきたことと重なりはするが、像論というエックハルトに内在する一つの理論を解釈の中心的な視点としたところに、彼の解釈の意義がある。もっとも、像についての純粋な理論をテキストの具体的な脈絡から切り離して抽出しようとする彼の手続きには、過剰解釈の印象を与える箇所もあるし、テキストの成立状況⁴⁾についての考察も最小限にとどめられており、具体的な分析に関しては再論の必要もあろう。

第二に、ヴィルデの解釈の最大の功績は、エックハルトの像論を一つの理論として考察するに留まらず、比喩を多用するエックハルトの文体の根拠をなすものとして見るところにある。

ヴィルデは、エックハルトの像論自体が、「言語的像 sprachliches Bild」である比喩によって構成されているところに着目する。ヴィルデによると、エックハルトの像論の核心は、ディートリッヒの像論を継承しながら、ディートリッヒにはない「像なき像 Bild ohne Bild」の概念を導入し、また「像を付与する bilden」ことを「像を脱却する entbilden」「像を超越する überbilden」として捉えるところにある。ところが、一つの比喩に対して次々と別の比喩をもち出すことによって比喩を止揚していくエックハルトの文体そのものが、まさに像を「像なき像」であらしめ、像を脱却・超越していく終わりなき過程にほかならない。ここにヴィルデは、像からの脱却という倫理的要請と、比喩という言語的像の豊かさとの、一見矛盾する二つの面がエックハルトにおいて並存している根拠を見出すのである。ちなみに、ヴィルデは、神秘主義的言語として解釈されがちな「神を強いる」などの強調的表現を像論から合理的に解釈しているが、この点もエックハルト思想の解明という見地から注目されよう。

像からの脱却・超越が、まさに比喩を無限に豊かに使用することによって遂行されているとのヴィルデの指摘は、エックハルトの聖書解釈及び説教の言語的形態に関する重要な発見であると言えよう。また、ヴィルデの研究は、ラテン語著作を主要な対象テキストとして行われてきたディートリッヒなどの哲学史的研究と、ドイツ語著作を主要な対象テキストとして行われてきた言語学的研究とを橋渡しするものとなっており、その意味で、今後のエックハルト研究の進むべき方向を示していると言えよう。

第三に、ヴィルデは、像論自体に関してもトマスとの比較を行っているが、エックハルト研究の焦点の一つであるアナログア論を像論に基づいて分析する最終章でも、トマスとの比較という方法を選んでいる。トマスとの比較が試みられるということは、

ディートリッヒとの関連に関心の重点が置かれている最近のエックハルト研究の動向を補正する意味で、注目される。

トマスの「比例性のアナロギア」に対して、エックハルトの論じるアナロギアは「帰属のアナロギア」であるとの理解が研究者の間では主流であるが、ヴィルデ解釈の特徴は、エックハルトのアナロギア論が、トマスが非本来的なアナロギアとみなす「比喩のアナロギア」への親近性を示すと見るところにある。ヴィルデは、両者のアナロギア論のそのような違いから、両者の聖書解釈の相違や文体の相違をも説明する。トマスは、bonus, sapiens, vivens, ensなどの述語を神についての本来的な述語として、他の比喩的な述語から区別し、比喩を用いる話法を無学者に適したものと規定する。それに対して、エックハルトにとって、すべての述語は神を言い表すに等しく不適であるゆえに、神に対する述語はすべて比喩的なものと考えられ、比喩を用いる話法が却って智者に適した話法として評価されるのである。さらに、比喩についての両者の異なった評価は、両者の人間論にも影響を及ぼしていることをヴィルデは指摘する。すなわち、トマスで想定されている、人間の階層・秩序は、エックハルトでは解消されるのである。

トマスとの比較は、エックハルトの思想を位置づけるために欠かせない作業であると思われる。確かに、影響関係で言うと、ディートリッヒなどドイツ・ドミニコ会派の哲学者との関係が注目されるが、エックハルトの精神史的位置づけを大局的見地から試みるなら、トマスとの比較考察が今後更に進められるべきではないかと考えられる。

以上に述べた三つの点からして、ヴィルデの書が重要な研究書であることは否定できまい。しかしながら、本評の最後に、ヴィルデの立論に関し二つの問題について指摘しておきたい。

第一に、エックハルトの倫理的要請は、罪論、秘蹟論、神愛論、友情論、苦惱論などさまざまな側面から展開されるが、ヴィルデの解釈は、豊かな広がりをもつ倫理的要請を（言語的）像からの脱却という抽象的な側面に局限して論じる結果になっている。像論を主題とするヴィルデの書に、エックハルト倫理思想の解明を求めるのは過大な要求に思われるかもしれないが、像論によって倫理思想が解明されるとともに、倫理思想によって像論が解明される可能性は視野に入れられるべきであろう。

第二の問題は、神と人間との一に関わる問題である。ヴィルデは、神と人間との一

を像論から解釈する。その説明によると、エックハルトでは、人間の魂は、神の像を映す鏡として考えられ、神と人間との一は原像と似像との一として考えられているとされる。ここで注目されるのは、ヴィルデが、神と神性との区別についても像論による解明を試みることである。つまり、神とは、人間の魂という鏡に映る限りでの神であり、神性とは、神自身における神である。この解釈からすると、神から脱却する「霊の貧」における神性との一は、原像と似像との一としてはもはや考えられないように思われる。ヴィルデは、神と人間との一は視作用における一としても考えられていると述べているが、それが、眼と見られる物との一なのか、それとも視作用と視作用との一なのかヴィルデの議論では明確ではない。エックハルトが考える神と人間との究極の一は果たして像論の範囲内で解釈できるのかと問うこともできよう。

以上に述べた二つの問題は、最終的には像論の位置づけに関わる問題である。エックハルト思想全体の中で像論がどのような位置を占めているのかを明らかにし、その上で像論の意義を捉えなおす必要があるのではなからうか。

注

- 1) Burkhard Mojsisch, *Meister Eckhart. Analogie, Univozität und Einheit*, Hamburg 1983.
- 2) Kurt Flasch, *Procedere ut imago. Das Hervorgehen des Intellekts aus seinem göttlichen Grund bei Meister Dietrich, Meister Eckhart und Berthold von Moosburg*, in: *Abendländische Mystik im Mittelalter. Symposium Kloster Engelberg 1984*, hg. v. K. Ruh, Stuttgart 1986, S. 125-134.
- 3) Loris Sturlese, *Mystik und Philosophie in der Bildlehre Meister Eckharts. Eine Lektüre von Pred. 16a Quint*, in: *Festschrift Walter Haug und Burghart Wachinger*, hg. v. Janota Johannes, Sappler Paul u. a., Tübingen 1992, S. 349-361.
- 4) 最近のエックハルト研究では、ルーの研究書の主張に従って、成立年代や受け手などのテキストの成立状況を考慮した研究が増えている。

Vgl. Kurt Ruh, *Meister Eckhart. Theologe, Prediger, Mystiker*, München² 1989.

Klaus Jacobi (Hg.), *Meister Eckhart. Lebensstationen - Redesituationen*, Berlin 1997.